**「君たちはどう生きるか」－コンプライアンスへの示唆**

2019年2月17日　小林

目次

1 はじめに

2 自分中心から他者中心のものの見方へ

　2.1一分子としての自分

　2.2 コンプライアンスへの示唆

3人と人とのつながり

　3.1人間分子の関係・網目の法則

　3.2 コンプライアンスへの示唆

4 正義感

　4.1友人たちの行為

　4.2 コンプライアンスへの示唆

　　4.2.1感動を与える教育

　　4.2.2正義の味方

5 まとめ

1. **はじめに**

吉野源三郎「君たちはどう生きるか」（岩波文庫、1982年11月）は、八十年以上前の1937年[[1]](#footnote-1)に出版された青少年向けの図書（「日本少国民文庫」の中の一冊）であるが、2017年に漫画版[[2]](#footnote-2)が出版されたことで再度注目を浴びた。

本書では、コペル君（あだ名）という15歳の少年が、叔父さんや友人たちとの会話・交遊をとおして、「立派な人間になるためにどう生きるか」を学んでいく。ストーリーが展開されていく中で、折に触れコペル君に考えるヒントを与えたのは、叔父さんがコペル君に手渡した大学ノートである。これは、叔父さんがコペル君の今は亡き父親（叔父さんの兄）の遺志をくんで、「立派な人間になってほしい」とその思いをつづったものである。

本書は青少年向けとして書かれたものだが、現代の社会人にも通じる内容となっている。筆者は本書を読んで企業におけるコンプライアンスに関しいくつかの示唆を得たので、それをここに書き留めておく。

1. **自分中心から他者中心のものの見方へ**
	1. **一分子としての自分**

「コペル君」は、叔父さんが付けたあだ名であり、その由来は、ものの見方についてのコペル君のある発見を叔父さんがコペルニクス的転回だとほめたことから来ている。その発見は、叔父さんと一緒に行ったデパートの屋上から街行く人たちを見て、コペル君は「人間て、ほんとに分子みたいなもの」だと感じ、「広い世の中の一分子として自分を」認識したことである。そして、叔父さんは次のように言う。

「昔の人は、みんな、太陽が地球のまわりをまわっていると、目で見たままに信じていた。これは、・・・・・人間というものが、いつでも、自分を中心としてものを見たりするという性質をもっているためなんだ。・・・・・自分中心の考え方を抜け切っているという人は、広い世の中にも、実にまれなのだ。殊に、損得にかかわることになると、自分を離れて正しく判断してゆくということは、非常にむずかしいことで、こういうことについてすら、コペルニクス風の考え方の出来る人は、非常に偉い人といっていい。たいがいの人が、手前勝手な考え方におちいって、ものの真理がわからなくなり、自分に都合のよいことだけを見てゆこうとするものなんだ。」

叔父さんの言わんとすることは、自分を社会の一員と認識したうえで、他者の立場になってものごとを考えなければいけないということである。

* 1. **コンプライアンスへの示唆**

叔父さんの言葉は、コンプライアンスに一つのヒントを与えているように思われる。

これまでの社員教育では、ある企業の一員であることを強く意識させ、その帰属意識によりその企業への忠誠心を高めるような教育がおこなわれているのではないだろうか。これはこれで否定されるべきものではないと思うが、コンプライアンス確保の観点からは、ある企業の一員であることの大前提として、社会の一員であるとの認識をしっかりと持たせることが重要ではないかと思う。そのうえで、社会の一員として、他者の立場になってものごとを考えることの重要性を認識させるべきではないかと思う。

企業への強い忠誠心を持った会社員にたいし、組織の上位者から利益や売上等のノルマが課された場合、その会社員はおうおうにして視野狭窄に陥り、わき目もふらずノルマ達成に突き進んでしまうのではないだろうか。会社員としての視点だけで、いかにしてノルマ達成を成し遂げるかを考えてしまう。ここにコンプライアンス違反の落とし穴があるように思われる。このような場合に、社会の一員であるとの認識を持ち、他者の立場になってものごとを考えることが心に植え付けられていれば、視野は社会全体に広がり、社会の一員としての視点でやるべきこと・やってはいけないことを考えることができるのではないだろうか。

コンプライアンス教育として、やってはいけないことを教える各論も重要であるのはもちろんであるが、それと同時に、社会の一員として、他者の立場になってものごとを考えるという社会人としての心構えを植え付ける教育も総論として重要だと思う。これにより、常に視野を社会全体に広げることができ、その社会の中で自分の行為がどのように評価されるのかを他者の立場から考えることができるようになる。これは、コンプライアンス違反を未然に防ぐことにつながるのではないだろうか。

1. **人と人とのつながり**
	1. **人間分子の関係・網目の法則**

ある日叔父さんは、コペル君にニュートンが万有引力の法則を発見したことの偉大さについて話をした。それは、分かりきったことと思っていることでも突きつめて考えてみるということだ。ニュートンの万有引力の発見は、木からリンゴが落ちるという分かりきったことを突きつめて考えたことにより成し遂げられた発見であった。

叔父さんは、ニュートンはリンゴが木から落ちるところを見て、そのリンゴの木の高さをどんどん伸ばしていったのだと、説明した。木が何十メートル、何百メートルの高さになってもリンゴは落ちてくる。しかし、月の高さまで伸ばしたらどうであろうか。ここでニュートンは万有引力に思い至った。

コペル君は、この話を聞いた日の夜中に目ざめたとき、ふとある考えが浮かんだ。それは、オーストラリア製の粉ミルクに関係することをどこまでも考えていったらどうなるのかということであった。粉ミルクの原料となる牛乳をとるためには牛の飼育・搾乳をする人たちがいて、牛乳の加工、缶の製造、缶に粉ミルクを詰める人たちもいて、その粉ミルク缶を運ぶ鉄道・船舶輸送に従事する人たちがいる。日本に着いた粉ミルク缶は、荷下ろしをする人や卸や小売店で働く人たちの手を経てようやく赤ちゃんの口にとどく。コペル君は、粉ミルク一つとっても、なんと多くの人たちがかかわっていることかを知った。

コペル君はこれを「人間分子の関係・網目の法則」と名付け、叔父さんに手紙で知らせたところ、叔父さんは大学ノートに返事を書いておいてくれた。概略、次のような内容であった。

とてもすばらしい発見だ。君が名付けた「人間分子の関係・網目の法則」は、経済学や社会学で「生産関係」と言われているものだが、コペル君が自分でこれに気が付いたのはとても偉いことだと思う。今日の世界においては、会社ははじめから外国に売り込むことを目あてに大規模に生産している。人間同志の世界的なつながりを土台にして、その上で仕事をしている。インドや中国の人びとは日本の綿織物や雑貨を必要とし、日本人はオーストラリアの羊毛やアメリカの石油がなくてはこまるものとなっている。見ず知らずの他人同士の間に、切っても切れないような関係ができてしまっている。でも、この関係は人間らしい人間関係になっていない。たとえ赤の他人との間にだって、人間らしい関係を打ちたてていくのが本当だ。人間らしい関係とは、お互いに好意をつくし、それを喜びとする関係だ。

* 1. **コンプライアンスへの示唆**

この叔父さんの人間関係を基礎とした社会観は、コンプライアンスの重要性を考えるときに有用な示唆を与えてくれるのではないだろうか。

社会で生み出されている商品やサービスは、多くの人が関与することで最終需要者に届けられる。これによって、社会が成り立っている。赤の他人と思われる人とも商品やサービスを介してつながっている。会社で働く人たちが、自社が作り出す商品やサービスについて、このような人と人とのつながりを意識することは、コンプライアンスの重要性をあらためて気付かせることになると思う。

コンプライアンス違反は、違反者自身や違反企業自身の不利益になるばかりではなく、商品やサービスを介してつながっている多くの人たちにも不利益をもたらすのである。企業の中で少人数の関係者だけでこっそりとおこなわれたコンプライアンス違反といえども、その影響は社会の広範囲に及ぶことになる。材料や部品の供給に従事する人たち、商品やサービスの提供に従事する人たち、そしてその商品やサービスを購入して生活する多くの人たちに何らかの不利益が及ぶのである。

このような広範囲の影響を認識することは、コンプライアンスの重要性を理解することにつながるはずだ。コンプライアンス教育において、自社の商品やサービスがいかに多くの人たちと関わり合っているかを、具体的に考えさせることは、この意味でとても重要なことではないかと思う。

1. **正義感**
	1. **友人たちの行為**

学校の教室でコペル君の友人・浦川君がいじめにあっていたところ、それを助けようと北見君が猛然といじめの加害者・山口に「弱い者いじめはよせ！」と抗議した。北見君もコペル君の友人で、頑固で正義感に燃える少年だ。北見君と山口は、とっくみあいのけんかになった。北見君は腕力が強いので、山口は北見君に何発も殴られてしまった。それを見た浦川君は、「もうゆるしてやってくれ」と北見君を止めたのだった。

そのとき教室に先生が入ってきて、北見君と山口にどちらが先に手を出したのか聞いたところ、北見君は正直に自分であると答えた。しかし、なぜ腕力に訴えなければならなかったのか、その理由はつげ口になると言って答えなかった。

一部始終を見ていたコペル君は、叔父さんに北見君の行為にも浦川君の行為にも感動したことを伝えた。

これについて、叔父さんは大学ノートに次のようなことを書いた。

立派な人になるということは、世間から悪く言われないとか、世間から見て非の打ちどころのない人になることを言っているわけではない。修身の授業で習ってきたことも大切だが、君に考えてもらわなければならない問題は、その先にある。言われたとおりに行動し、教えられたとおりに生きていくだけでは一人前の人間にはなれない。世間の目から見た判断ではなく、自分の魂で人間の立派さが何なのかを知ることだ。心底から、立派な人間になりたいと思うこと、これが大切だ。良いことを良いこととし、悪いことを悪いことと判断するとき、胸からわき出てくる生き生きとした感情に貫かれていなければならない。「誰がなんといったって」というくらいの心の張りがなければならない。

* 1. **コンプライアンスへの示唆**
		1. **感動を与える教育**

コペル君は、北見君と浦川君の行為に感動したことにより、自分もそのような行為をおこなうことのできる立派な人になりたいと思ったことであろう。人間は感動を覚えたことを契機に、「自分もこうなりたい」と強く思うものである。

コンプライアンス教育においても、これを応用することができるのではないだろうか。ケーススタディや映画等により感動を体験し、それを契機に、「コンプライアンスの観点から立派な会社員になる」との決意を持たせることである。このようなことも、コンプライアンス教育の一環として検討に値するのではないだろうか。

* + 1. **正義の味方**

上記の叔父さんの言葉は、企業で働く人たちにも当てはまる。企業の中でコンプライアンス違反が起きるとき、その当事者の心には、「わき出てくる生き生きとした感情」も「「誰がなんといったって」というくらいの心の張り」も、ないのであろう。あるのは、「上司から言われたからしょうがなく」や「まわりの者が賛成するからやむを得ず」などの沈んだ感情ではないだろうか。この「わき出てくる生き生きとした感情」も「「誰がなんといったって」というくらいの心の張り」も、一言で言えば、正義感なのであろう。叔父さんは、人間としてもっとも重要なことは正義を貫くことだと言っているのであろう。

これまでのコンプライアンス教育においては、「企業倫理」という言い方に影響されたためなのか、倫理感の醸成に焦点があてられているように思われるが、正義感にもより一層の焦点があてられるべきではないかと思う[[3]](#footnote-3)。

「正義の味方」は、ヒーローであり、誰でもヒーローにはあこがれる。その一方で、「倫理」は高尚な人が身に付ける堅苦しいものというイメージがあるのではないだろうか。コンプライアンス教育は、「正義の味方」を育成する教育であってよいと思う。

1. **まとめ**

「君たちはどう生きるか」を読んで気付いたコンプライアンスへの示唆を何点か述べてきた。それを要約すれば、以下のように言うことができる。

一つは、ある会社への帰属意識の大前提として、社会の一員であるとの意識をしっかりと持たせ、そのうえで他者の立場になって考えることの重要性を認識させることである。二つ目は、自社の商品・サービスが最終需要者に届けられるまでにいかに多くの人たちが関わっているかを具体的に考えさせることである。これは、コンプライアンス違反が社会の広範囲に影響を及ぼすことを知ることとなる。三つ目は、感動を与える教育により、「コンプライアンスの観点から立派な会社員になる」との決意を持たせることである。四つ目は、コンプライアンス教育は、正義感を醸成し、「正義の味方」を育成するための教育であってよいのではないかということである。

上記の四点は、コンプライアンスの実務としては、まだ具体性に欠ける。ここで得た示唆を実務にむすびつけるのは、今後の課題である。

「君たちはどう生きるか」は、次の文章で終わっている。

「そこで、最後に、みなさんにおたずねしたいと思います。－　君たちは、どう生きるか。」

あとは、自分で考えなさいということである。コンプライアンス教育においても、自分で考えることが重要である。「何々をしてはいけない」と命令される教育は、受講者にとっておもしろいものではない。おもしろくなければ身に付かない。コンプライアンス教育においても、同じであろう。

コンプライアンス確保という経営目標達成のため、「企業で働く者としてどう生きるか」を自分自身で考えていくことが重要だと思う。

以上

1. この年の7月、盧溝橋事件が起き、日本と中国は全面戦争に突入した。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「漫画 君たちはどう生きるか」（イラスト羽賀翔一、マガジンハウス、2017年8月）。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 佐々木司「武士道とコンプライアンス」（2018年7月21日）においても「服従」という心理作用に打ち勝つため倫理感と正義感を持つことの必要性が指摘されている。また、ソフトバンク・グループ（株）会長・社長の孫正義氏は、社内向けのスピーチ等でしばしば「損（孫）しても正義」と言って、正義感の重要性に言及する。 [↑](#footnote-ref-3)